

ハンナ・アーレントの政治哲学 (10) — 1 『冬ソナ』、『ヨン様』ブームのアーレント的・フェミニズム的解釈

志水紀代子

Hannah Arendt's Political Philosophy (10)—1 Interpretation of "The boom of Winter Sonata and its star Bae Yong Joon" from the Viewpoint of the Arendtean Feminism

KIYOKO Shimizu

Summary

The World Woman Society Discussion (Women's Worlds 2005 9th: International Interdisciplinary Congress on Women) was held from June 19. to 24. in Seoul, Korea. At Ewha Women's University and another venue, more than 2,300 women researchers and activists from over 90 countries convened.

The Main Theme of Congress was "Embracing the Earth-East-West, North-South" and divided into more than 500 sessions on such 20 subheads as "Globalization", "Gender Identity", "Gender & Religions", "Sexuality", "Law & Human Right", "Economy, Work & Welfare", "Environment & Agriculture", "Culture & Creativity", "Politics & Good Governance", "Gender & Media", "Women's Studies" "Gender & ICT" etc.

Among the study reports, what particularly attracted the attention of many participants and media was the Korean drama "Winter Sonata". There was a coordinated session with women researchers of Asia, mainly from Hong Kong and Taiwan who showed a great deal of interest in Korean TV drama

At the present, Korean TV drama is very popular in all Asia. Especially the innocent love drama supervised by Yoon Suk Ho is attracting public attention. Among his works, "Winter Sonata" is considered to be of highest quality and is sending a new wave of popular culture from Asia.

Also in Japan, this TV drama is received with enthusiasm by women of all generations, from teen agers to seniors. To me, at first, this was a very curious social phenomenon difficult to explain. However, after watching the program myself, I could understand why so many Japanese women who in the past showed little interest for Korea became so enchanted and rushed to visit Korea and began studying Korean culture.

I would like to analyze in my paper this new development that is positively affecting the relationship between Japan and Korea, centering around the "boom of Winter Sonata" and its star Bae Yong Joon, from the viewpoint of Hanna Arendt.

The key concept I shall use on this occasion is "friendship" as defined by Arendt, whom I have been researching during my entire academic career.

Keywords: innocent love, friendship, generosity, make peace, the thinking public

はじめに

2005年6月19日から24日にかけて、韓国ソウル市の梨花（イファ）女子大学を中心に、西江（ソガン）大学、延世（ヨンセ）大学などで開催された第9回女性に関する国際学際会議（Women's Worlds 2005 9th: International Interdisciplinary Congress on Women）（「世界女性学会」）が開催され、世界90ヵ国から約2300余名の女性研究者・アクティビストが集まった。この学会は、1981年にイスラエルで第一回目が開催され、その後3年ごとに世界各地で開催されているが、アジアでの開催は今回が初めてで、次回はスペインのマドリードの大学が予定されている。大会の共通テーマは「地球を抱きしめて～東西南北～」（Embracing the Earth～East-West, North-South～）で20のサブテーマも社会、文化、芸術、経済、環境、政治、生命科学など500以上のセッションやワークショップに分かれて発表が行われた。（cf. 小松満貴子氏HP掲載「時事随想 - 韓国ソウルで開かれた第9回女性に関する国際学際会議参加報告」<http://www.tcn.thg.ne.jp/gender-free>）その中に、香港や台湾の研究者を中心にしたアジアの女性研究者が合同で行った「冬のソナタ」を中心にした韓国ドラマについての研究報告が、多くの大会参加者のみならず、内外のメディアの関心を集めた。

そのセッションの様子を韓国の新聞「中央日報」日本語版が次のように報じている。日本で大ブレイクしたことにも言及されており長くなるが全文を引用する。

「ペ・ヨンジュンは浪漫的英雄」

21日午後、梨花女子（イファヨジャ）大ポスコ館351号には時ならぬ『冬のソナタ』のテーマ曲が流れ、壁面に設置されたスクリーンには『冬のソナタ』の主要場面がパノラマのように映し出された。

部屋の中をぎっしり埋めたアジア人女性らはあちこちで感嘆の声とともに「ウィンターソナタ」と声を上げた。韓流に乗って韓国ドラマが世界女性学会の主要テーマとなったのである。

この日の討議のテーマは韓流に乗ってアジアで人気を集めた韓国ドラマであった。

テーマ発表を行った香港シティ大学のチョン・ミン博士は『冬のソナタ』をはじめとし『秋の童話』『夏の香り』などの韓国ドラマがアジア人女性らに人気を呼んだ理由を分析した。

チョン博士は永遠の愛（endless love）をテーマにした3作品がアジア全域を巻きこんだのは「現実からは浪漫が消えたから」と分析した。

時間に追われ、成功に向けて強迫観念に苦しめられている人々は、純粋な愛の典型を見せてくれるドラマで代理満足を感じるということだ。台湾国立東華大学のヤン・パンチ博士は、女性学的な観点で韓流スターペ・ヨンジュンの人気の秘訣を分析した。

自ら韓国ドラマのファンだというヤン博士は、ペを「浪漫的英雄（romantic hero）」であると定義した。また「自由奔放で独立的な生き方を望む現代女性らに、ペ・ヨンジュンのソフトな微笑はまさに『サンシャイン』だ」という。

聴衆の熱気も発表者に劣らず熱かった。ある参加者は「韓国ドラマではキスを除いて性的（sexual）場面がほとんどない。そのような純粋な愛がアジア、特に日本女性に人気があるのだろう」と指摘した。

韓国映画では暴力的で性的場面が普通に出てくるが、ドラマでは純粋な愛を描こうとしており、韓国文化は複雑だという意見もあった。

韓国女性研究院イ・スヨン氏は「儒教的価値と西欧文化の間で葛藤をしているアジア女性に韓国のドラマは愛と浪漫という幻想で、その葛藤を覆ってくれる役割をしている」とし「アジア女性らが新しいアイデンティティを形成するのに韓国ドラマが影響を及ぼしている」と述べた。¹

筆者自身はこの日、韓国の「戦争と女性人権センター」と、わが「女性・戦争・人権」学会の共同研究で4年間にわたって作業を進めてきた「日韓女性による共同歴史教材編纂」の打ち合わせの会合があり、残念ながらこのセッションに出ることが出来なかったが、大会レジュメ集²と、この報道で知る限りにおいて、アジアを席卷している韓国ドラマのブームの中でも、特にユン・ソクホ監督による四季シリーズで描かれている純愛の世界が注目を集め、それが、ドラマとして完成度の高い「冬のソナタ」の大ブレイクで、単なる一過性のものではないこと、またアジアを中心に世界に発信する新たな大衆文化の波として、人々を巻き込んでいっている確かな手ごたえをここで得ることができた。記事を読む限り、このセッションで取り上げられたのは、すべてユン・ソクホ監督の作品であるが、中でも「冬のソナタ」が日本でブームになったことへの言及に関心をそそられた。聴衆として参加した日本人がこの席でどのようなコメントをしたのか、それについては残念ながら、情報はないが、日本における「冬ソナ」の大ブレイク、その後の「ヨン様」ブームについては、韓国のみならず、アジアの諸国においても特筆に値する社会現象として取り上げられ注目されていることを、ここでも改めて思い知らされる結果となったのである。

日本のこの大ブレイク現象に、当初筆者自身も大いに戸惑い、その謎を解くことに関心を持った。とりわけこのドラマを観ることがきっかけで、これまで韓国にまったくといていほど関心を示さなかった日本の中老年の女性たちが、これほどまでに韓国に親密な感情を持つようになったのは何故かに、一層関心が深まったのである。すでに社会現象化していることで、さまざまな分析が行われ、解説されてきているが、それらについては後述する。

韓国映画やドラマの放映がその後日本でも相次ぎ、多くの韓国の俳優が日本にやってきて人気を博しているが、そのなかで「冬ソナ」の主人公を演じたことをきっかけに、いまなお、衰えることなくそのファン層を広げているのが、シンポジウムのなかでも取り上げられていたベ・ヨンジュン (Bae Yong Joon) その人である。

今年3月17日に、彼が出演する映画「四月の雪」(原題「外出」)の撮影中の公開記者会見の席上、日韓の間でその帰属を巡って紛糾した「竹島(独島^{ドクト})問題」について彼自身の見解を求められ、重要な問題だと思われるが、この席ではなく、しかるべきところで、自分の意見を述べさせて頂くと明言、その後3月21日に自身のHPの公式サイトで、この約束をきっちり果たしている。³

「冬のソナタ」というドラマに、俳優生命を賭けて取り組んだというベ・ヨンジュンだが、この作品によって一躍韓国を代表する国際スターのホープとしての一步を踏み出した。見事なルッ

クスだけでなく、俳優としてのプロ意識をもつ彼は、この一件にみられるように、一俳優の域を越えた公人としての責任を自覚している自立した人間である。ファンを「家族」と呼んで大切にすることで知られる彼は、ドラマのPRのためにアジア各国を訪問し、アジアは一つという確信を持ったという。新潟の地震被災者への支援カンパや、スマトラ沖の津波被災地へのカンパなどの国境を越えた一連の活動で、その彼の思いを裏付ける実績を積み重ねることで、さらに多くの支援者を増やすことになった。彼はプロとして、一作ごとに進歩した演技を求めて、飽くなく精進を続けていく中で、さらに読書を通して人間的深みを究め、哲学的素養を身につけて内面から演技していこうとしている。今日もっとも人々が求めている理想的な人物として、いやが上にも人心を動かす俳優であることは衆目の認めるところであろう。そのような彼をして「浪漫的英雄」と名づけた報告者に多くの参加者が共感をおぼえたのではなかろうか。そんな彼の素顔が明かされ、その人生観や精神的・内面的側面が、彼の迫力ある演技を支えていることが明らかになることによって、日本の芸能界やメディアの娯楽番組の水準の低さに辟易していた多くの日本女性が、彼を通して韓国を知り、韓国の伝統文化や食文化の魅力、また映画そのものの面白さにはまっていったことが推測される。彼の存在が、日本のTVドラマや映画産業に、有形無形の計り知れない大きな影響を与えたのは紛れも無い事実であろう。

ところで私は今回、日本国内における「冬ソナ」ブーム、ペ・ヨンジュンブームについて、これまで私自身がライフワークにしてきたハンナ・アーレントのフェミニズム的解釈の視点から、実際に関わってきた日韓のさまざまな関係性を振り返りつつ、今、日本で「冬ソナ」、ペ・ヨンジュンを通してもたらされたこの草の根の大衆文化交流を掘り下げてみたい。その「はざま」からみえてくるもの、そして、今、朝鮮半島との間に、歴史的に未解決のさまざまな問題を抱えるこの日本にあって、このブームが一過性性のものとはならず、世界に通用する普遍的価値を共有していく可能性をもつものであること、またそれが出来るためにわれわれに求められていることは何かについて考えたい。今回と次回の2回にわけて、このブームを分析する中からその答えを見つけていくことができればと思う。

「なぜ日本でこれほどまでに？」

先のシンポジウムの報告にもあるように、韓国のTVドラマを中心とした韓流ブームは、すでに台湾や香港などでは2002年ごろから始まっていたといわれるが、日本でもこのころすでに、優れた韓国の映画に注目していた人たちがいた。⁴ 上記したように『冬のソナタ』を制作したユン・ソクホ監督 (Yoon Suk Ho) の作品では、2000年の『秋の童話』が、韓国国内で高い視聴率を上げ、香港・台湾などのアジアの諸国でも評判を呼んでいたのである。2002年制作の『冬のソナタ』は、翌年NHKの衛星放送で放映されて評判を呼び、続いて地上波で放映された後、ついにハンゲル版字幕スーパーの完全版で2004年12月に放映されるという異例の大ブレイクが日本で起こったことで、その反響は韓国で改めてこの作品の見直し、再放映、再々放映が行われるという

事態を引き起こしたといわれる。

その自著『冬のソナタは終わらない』(廣済堂出版 2005年)において、ユン・ソクホ監督は、このような現象に対して、監督自身の率直な驚きの気持ちを次のように述べている。

「なぜ日本でこれほどまでに？」とは、私自身、繰り返し考えた問いでした。そして、なぜ私が日本の皆さんをこれほどに引き付けるドラマを作ることができたのか、私は日本人でもない日本で生まれ育ったわけでもないのに——などなど、考えずにはおれませんでした。

日本のファンが私のドラマに共感し、楽しんでくださる、ということは、私の感性と日本人の感性が似ているということでしょう。それがまた、私にはとても不思議でした。

そして、『冬のソナタ』のブームは、それまで私自身が抱いていた日本観をも大きく変え、日本に積極的に目を向けるきっかけにもなりました。日本に何度も足を運び、日本人と直に触れるうち、日本人に対する私の理解が深まったのです。

ドラマの一監督として、ただただ懸命に撮ったドラマが、このような形で、私自身にもかえってくるとは、演出した当時は思いもよらなかったことでした。

日本での『冬のソナタ』ブームは、日本人にも大きな変化をもたらしました。『冬のソナタ』ブームは、次第に、ドラマブームにとどまらず、日本人の韓国全体への関心へと繋がっていったのです。韓国の言葉を学び、韓国に足を運ぶ人がどんどん増えていきました。

いま、韓国と日本は、これまでにないほどの友好的な関係を築くまでになっています。1本のドラマが国民感情までも好転させうるなんて。そんなことを予想した人がいったい、どこにいたでしょうか。

『冬のソナタ』の生んだパワーに、ただただ圧倒されています。⁵ (下線強調引用者)

監督自らがここで述べている率直な感想は、日韓のこれまでの関係性を自覚的に受け止め、関係修復に何らかの形で携わってきたものであれば、誰しものが共感を覚え、誰しものがいっそうその劇的な変化に驚き、複雑な心境になったのではなかっただろうか。

事実、この一大ブレイクの担い手である日本人女性の在り様を考えたとき、私は監督がこの著書の中で述べる日本人女性に対するイメージを、当初複雑な思いで受け止めざるを得なかった。それは、日韓の間に横たわっていた深い溝を一気に乗り越える橋が架橋されたこととして喜ばしいことであると同時に、その橋の下に横たわる溝について、気がついているのであろうか、余りにも無頓着、無神経すぎるのではないかと、不安に駆られたからである。

ここで筆者は、アーレントが、1959年にハンブルク市から送られた「レッシング賞」を受賞した時の演説のパフォーマンスを思い出し、彼女がそのようなパフォーマンスをすることを考えざるを得なかったそのときの心境がどのようであったかを、思わずにはいられなかった。⁶ そしてまた、元梨花女子大の教授で、挺身隊問題対策協議会の前共同代表、そして2000年12月に東京で開催された「女性国際戦犯法廷」の共同代表をも務められたユン・ジョンオク氏(Yun Chong Ok)を迎えて、2003年11月に大阪で、「女性・戦争・人権」学会主催の講演会を持ったとき、会場から「何

故日本語で話されるのか。母国語である韓国語で何故講演をされないのか」という在日の方からの鋭い質問を受けたときのことを思い出したのである。⁷ それは重い問いかけであった。

次にそのことを紹介しておきたい。

何故日本語で話されるのか

2003年11月23日に、尹貞玉（ユン・ジョンオク）著鈴木裕子解説『平和を希求して「慰安婦」被害者の尊厳回復へのあゆみ』（白澤社 2003年）の出版を記念して「女性・戦争・人権」学会主催の講演会があった。配られた資料に、前もって日本語で話して頂くことが明記されていたものの、質疑応答の時間になって、会場から「何故尹（ユン）さんの母語である韓国語でお話にならないのか。」という鋭い問いかけが、在日の方から日本語で出された。

ユン氏の流暢な日本語は、そのまま聴衆の心のひだにまで届く。多くの聴衆はあたかも日本語が共通言語であるかのような錯覚をもって、彼女は、何故そのように流暢な日本語を話されるかについては疑問すら持つことがなかったかもしれない。彼女が、過去、日本が強制占領していた隣国のひとであり、「慰安婦」にされ、被害を受けた女性たちと同世代で、それらのひとたちの名誉を回復するために奔走し、そのために何十年も使うことの無かった「強制された日本語」をそのために再び使い始めたという経緯がそこにはあった。だが、彼女が弁解がましくこのようなことを公に述べることは取立てなく、彼女がどのような思いで日本語で語っているかをほとんどの聴衆は知らなかったからである。かの在日の参加者からの問いかけは、強いて言えば、このような歴史的背景も、在日の受けている差別的な今日の状況も知らない気の遠くなるほど「鈍感な日本人」、あるいは「無邪気で頑迷な日本人」への問いかけになっていたのである。ユン氏は、それに対して静かに韓国語で語り始めた。聴衆は、通訳を介して伝えられる彼女のメッセージにふれてはじめて自らを知ることとなったのである。そして後半、彼女が再び日本語で語り始めた時、そこに彼女の深い友情（友愛）を今まで以上に感じとったのであった。

ところで、アーレントが旧西ドイツのハンブルク市から贈られた「レッシング賞」を受賞した時に、その受賞演説で行なったパフォーマンスについては、90年代のアメリカのフェミニストであるリサ・J・デイッシュが見事にそのパフォーマンスを解説している。⁸ それはアーレントが、敢えて「レッシング賞」を、自らを「ユダヤ人」と特定して受賞することにおいて、「ドイツ人」への問いかけ・呼びかけをおこなうというものであった。

「レッシング賞」受賞時のアーレントのパフォーマンスとユン氏

アーレントは、『暗い時代の人々』（*Men in Dark Times*, 1968）と題して、悪夢のような狂気の時代—20世紀—を共に生きたローザ・ルクセンブルクやカール・ヤスパース、アイザック・ディーネセン、ヘルマン・ブロッホ、ヴァルター・ベンヤミン、ベルトルト・ブレヒトら11人の評伝を書いているが、その中で、「暗い時代の人間性」（*On Humanity in Dark Times*）とい

う副題がつけられた冒頭の「レッシング考」(‘Thoughts about Lessing’) だけはこの本のなかでは例外で、レッシングは18世紀の思想家である。

このレッシング論文は、前述したとおり、もともと彼女が1959年にハンブルク自由市で、レッシングに因んだ賞を受賞した時の受賞演説がもとになっている。「母国ドイツを追われたユダヤ人」としてレッシング賞を受賞することを拒絶することも出来たアーレントがしたことは、拒絶することではなく、むしろ受賞し、それに応えて彼女が行なうこの受賞記念講演の中で、ドイツ人に、自分は「母国ドイツを追われたユダヤ人」であり、今、ここでその「母国ドイツ」から賞をもらうものであるが、過去にドイツ人とユダヤ人の間にどのような不幸な事実があったかを、この機会に相互に思い出し、そのような事実を、決して「カーペットの下に押し込む」ことなく、常に、このような過去を想起しつつ、お互いにその悪夢を繰り返さないように共に闘おうと呼びかけるものであった。このパフォーマンスはいささか難解ながら示唆に富んでいて、この書を訳した阿部斉氏は、「…彼女がレッシングの中に見出すのは、「真理」を犠牲にしても「友情」を保持しようという態度であり、公的領域の光が世界を照らさなくなった暗黒の時代には、こうした態度の持つ意味が再発見されなければならない…」とあとがきに記している。⁹ (強調引用者) アーレント自身の体験をもとに語られるその友情(愛)論に、彼女の非凡さと今日性が読みとれるが、私はここに、ユン・ジョンオク(尹貞玉)氏の活動(action)が見事にオーバーラップしていたことを否定できない。先のユン氏とわれわれ—少なくとも私のような日本人—との関わりにおいて、あるべき関係性がここにおいて見事に示唆されていると思われたのである。

今またこのドイツ語の「レッシング考」の解析は、二十一世紀の現今の『暗い時代』に切りこんでいくヒントになっているように思われる。ここで問われているのは、提示された友情(友愛)を、われわれがどのように受け止め、それに答えていくことが出来るかということではなからうか。

この関係性を次に私は、ユン・ソクホ監督やペ・ヨンジュンと日本のファンとの関係性において検証してみたい。

ペ・ヨンジュンと日本のファン(「家族」)との関係性

果たして、今年3月、日韓間で竹島(独島)問題が起こって、¹⁰ 韓国から日本に来る観光客の数が激減し、韓流ブームが一気に冷え込んだかに見えた。だが、このようなことに関係なく、日本から韓国に行った観光客はむしろ増えていたという。また、ペ・ヨンジュンが記者会見の席上、竹島(独島)問題で発言を保留したことで、韓国で非難の声が上がって、彼が苦境に立たされたことに心を痛める日本のファンが、公式サイトに多くの励ましのメッセージを寄せているのを目撃した。そこには実に多様な意見、思いが寄せられていて、ただ、政治に無関心・無関係で、観光や買い物に浮かれるだけの女性たちばかりではないことが、そのメールの書き込みを読むことで理解できた。

以下にその公式サイトに寄せられた意見をいくつか紹介させていただきます。

<スレッド> **より

みなさん、こんにちは。

ここに集う皆さんには心を痛める悲しいニュースが報じられていますね。

皆さん、どうぞ元気を出してください。

どんなことがあっても私たちはたった一つの地球に住む同じ地球市民です。

きっと冷静に円満解決できるその日が来ると信じましょう。

韓国人は韓国人の意見があって私たち日本人には日本人の意見があるとは思いますが。

それは全部正解であってまた、全部間違いでもあると思います。

このままいけば平行線をたどって折り合う部分など見つからないと思います。

どちらかが引き下がれば問題解決ですが、きっとそんなことはお互いにしないでしょ。

一つの地球、私は女だからでしょうか？竹島がどちらになれどなくなるわけではないのという考えです。それなのに醜いことをする人まで現れて、悲しいです。

皆さんのおかげで、韓国に対する偏見も消え、ドラマを楽しむようになれた私です。

せっかく皆さんの力あって、ここまで友好ムードが盛り上がったのに残念です。

少なくとも私たちだけでも冷静に、友好ムードをぶち壊したりしないよう、がんばれば良いなど思い書き込みしました。

最後になりましたが、新参者の私の意見を最後まで読んでくださり、有難うございます。

私は皆さんのことを心から尊敬しています。

なんの偏見も無く、いいものはいいと歓迎する姿に心を動かされました。

そして私の変な偏見やわだかまりを解いてくださるきっかけを作ってくださったのは皆さんだと思っています。

そして歴史や国家の問題は私たちの意志とは別のところでいつも動いていて、悲しく思います。なんとかこの問題も新たなムーブメントが起こって吹き飛ばしてくれれば良いのになと心から感じます。

私は一地球市民として、ペ・ヨンジュンに出会えて幸せです。

そのきっかけを作ってくださったサポーター（家族）の皆さんに再度感謝を致しまして、この辺にて失礼致します。（下線引用者）

以上のスレッドに以下のレスが返されている。（引用者の責任において7件を選択している）

- 1.（竹島問題について）インタビューで、記者の方が、ヨンジュンに、どう思うか？と、意見を求めたところ、司会の方が、「今は、映画の質問を…」と、さえぎろうとしたら、ヨンジュンつたら、さっと、マイクを手にして、「極めて重要な事案だと考えており、国民の一

人として非常に心配し、関心を持っています。しかし、この席は映画のために用意された席であるだけに、この席には似合わない話のようですので、後で機会を作り、別の席で話をしたいです。申し訳ありません」と、きちんと、自分の言葉で、メッセージを残しました。普通、こんなこと、俳優自ら言いませんよ～～！！やっぱり、ヨンジョニ、は、いい男、いい男、あぁ～いい男・・

2. 韓国の人達に抑圧以前に、竹島問題でサイトがとまると聞いてどうゆう事なのだろうと思います。あと、政治問題がとりあげられる度にふさわしくないと言われる事にも疑問を感じます。ふりかえると、小学校、中学校、高校と公立でできましたが、歴史の時間に韓国併合なんて聞いたことも見たことも無かったように思えます。少しぶつとぶようですが、されてきた怒りがある様に、現在の日本の女性のなかにもそのような抑圧が、目に見えない形であるように思えます。安心して下さい。変った事を言い出しましたが、私はピアノの教師をめざしている36歳のふつうの市民です。ヨンちゃんの事とどう繋がるかとゆうと、竹島問題や政治に拒否反応をおこす感覚の転換が、女性の社会的立場の変革へつながるように思えるとゆう事です。

3. **さま、はじめまして～～☆* ここでは、政治問題は???と思いつつやはり 避けては通れない問題ですね…今までずーと先送りして来たのですから…。

政治的な事はご法度なのですが…やはりまじめに考えなきゃいけないと思いますね。「ちゃんと自分の意見を言わない、言えない」ところが一番いけないと思うんですよ。「もう解決済みの問題です。」って、それは先日、拉致問題であの国に言われてすごくカッチンと来た言葉。日本の政治家さん、同じ言い方で逃げないでって思いました。せっかくの友情年だもの…一気にわだかまりを解かすいい機会でもあるんです。いじめはいじめられた方がいじめと思えばいじめ…よく学校で聞く言葉です。「きちりここは謝る、でもこの点についてはこっちにも言い分がある。」しっかり言って欲しいです。なにぶん自分が生まれてくる前の事です。もう自分の子供の代にまで引っ張って行って欲しくはないと思います。韓国では自分の意見をしっかり言えるのがちゃんとした大人…と言うそうですね。日本の責任者にもそうであって欲しいと思います。

4. この問題は本当に難しいものがあると思います。又ここに取り上げるのもどうかと…。しかし韓国の俳優のファンになった事でやはり日本と韓国の関係をしっかりと各個人がふまえた上で韓国人である彼を応援し見守っていく必要があると思います。この問題に関係ないよ…と思う方もいると思いますが、応援と会いたいと思う気持ちで行動してしまうと今の現状を見て、彼も人間ですのでいつかは疲れ果てる事になるかもしれません。そうなるとうとうなってしまうのか……今後の彼のことが、いろいろな事を考えると心配でなりません！！！！

5. **様 領土問題は、日本が戦後処理をきちんとしなかったこととつながっていて国家間で解決しなければならない事柄だと思います。ただ、一日本人として、歴史を学び、何が出来るかを考えなければなりません。 ヨンジュンさんが、大きなきっかけを作ってくださいました。おっしゃるように、アジアで固まるのではなく、地球市民として、手を取り合って歩みたいと思います。ヨンジュンさんは、もうすぐ世界のヨンジュンさんとして、はばたきます。一人の小さな力は、何もできない。悲しくなりますが、あきらめないで平和を祈りましょう。ここで家族になれたこと感謝！しています。
6. 第二次世界大戦中、日本占領下のビルマ（現ミャンマー）で 抑留生活を送った英国人の シーリア・ミードさん（66）が17日、 抑留中に優しく気遣ってくれた日本兵の加藤克正さん（79年に67歳で死去）の遺族と東京で初めて対面した。 シーリアさんは「暗闇の世界に光をもたらしてくれた。 勇気と優しさを持つ誇るべき人でした」と加藤さんの遺族に語りかけた。 日本に複雑な思いを抱き続けたシーリアさんだが、 今回の来日を「積年の思いが浄化される旅だった」と振り返った。 私たち日本人、米国人、英国人は戦いましたが、今現在はお互いに憎んだりはありません。
7. **様、私もこの問題には心を痛めています。ペ・ヨンジュンさんのおかげでこんなにも韓国を知りたい、韓国へ行きたいと思う日本人が増え、民衆の間では温かい交流につながっていきそうな感じがしていますのに。私も2月に思い切って韓国へ行って来た一人ですが、その理由の一つは、やはり、ドラマの中の登場人物たちにさまざまなことを教えてもらったことがきっかけでした。それは、人として生きる上で大切にすべきことでした。最近の日本人が失おうとしている世界がそこにはありました。十数年ぶりにパスポートをとり、韓国まで出かけた私は、やはり飾らずに一生懸命な韓国の人が好きになりました。わずかな時間で往来でき、肌の色も体型も私たちと変わらないアジアの人たちがいる国。アジアサミット開催で、これから一つになろうとしている今、どうして島根県は…という思いで、残念でなりません。"（下線引用者）

私はこの、相互に意見交換ができるホームページがあること、ここで書き込まれているメッセージに共有されている友情（友愛）に注目した。そこでは、時にルール違反とされるような書き込みがされることもあるが、ルール違反すれすれで管理者の判断で議論がオープンにされる書き込み（スレッド）が残されることもある。それが非常に重要だと私は考えている。

このホームページに投稿する人には、ペ・ヨンジュンのファン（＝「家族」）であることにおいて繋がりたい、思いを共有したいという気持ちがベースにあることが見て取れる。おそらくそれ

は、どのようなホームページにも共通することなのであろうが、そこには「ペ・ヨンジュンのファンである」という共通した思いがある。だが、他のホームページと違う（と私が判断するのであるが）のは、非常に多様な層の人たちの意見交換の場になっているということである。時に男性と思しき人からのスレッドの立ち上げもあれば、ただただうっとりと夢見るファンと思しき投稿もあり、千差万別であるが、多様な意見が交換される複数の意見交換の場として、原点で共有されている「ペ・ヨンジュンのファンであること」の思いに注目したい。そこには「冬のソナタ」の優れたドラマ性と、それを体現することになった主人公への憧れが見事にフィットしているが、そこに見つけられ共有された普遍的価値こそが、ここでのキーワードとなっているからである。それは、人間の素晴らしさ、節度ある友情（友愛）の大切さにほかならない。

ところで、このドラマの中心に位置するポラリスは、女優チェ・ジウ（Choi Jiwoo）演じるところのユジンである。運命に翻弄されつつ、その中で、彼女の生き方・考え方が、随所に、印象的な言葉で語られる。ユン・ソクホ監督は、自身の憧れる女性像としてヒロインの「女らしさ」を強調しているが、実は、母親を愛しつつも、彼女のもつ自立した生き方、伝統文化や習俗を克って生きようとする「勁（つよ）さ」こそがこのドラマの芯になっているのであり、その彼女をよく理解し、対等のパートナーとして支え、その相手の幸せのためには自己抑制を厭わない、今求められている究極の理想的な男性像として、ペ・ヨンジュンその人、そして彼の演じるチュンサンの存在があると私は理解している。彼は、シングルマザーであるピアニストの母親の、不可解で、彼をさまざまな窮地に陥れることになる行動に対しても、そこで述べられる伝統文化に縛られた男性社会の中で必死で生きてきた彼女のこれまでの生き様に理解を示す。彼を失意のどん底に突き落とした彼女の哀しさを、どこまでも受容していくのである。そこに自らの人生を重ねた日本女性も多かったことだろう。

また主人公の二人に対して、それぞれのひたむきな愛に報われることのないサンヒョクやチェリンが、失恋の悲しみをも受容し、それを友情として高めていく「愛と赦し」。ユン・ソクホ監督がこのドラマの中で描こうとした理想的な人間愛の究極の姿として、「初恋を成就」させ、かつそれに関わって失恋する人間、失意のなかにある人に人間的成長を求め、友愛を育むことが、このドラマの基本テーマであると私は考える。その意味で要所要所に登場する高校2年生時の担任だった「ゴリラ先生」の一言がこのドラマのヒントになっている。¹²

このテーマは、暴力が支配する今、時代そのものが求めているテーマでもある。このドラマが一大ブレイクを引き起こしたのは、決して理由のないことではない。そして、多くの女性がこのドラマに惹かれ、ペ・ヨンジュンに重ねて見ているのは、丸山眞男のいう「他者存在を知る」人間像であり、このような時代において求められている男性像なのである。

そして、ユジンのもつ「勁（つよ）さ」と「優しさ」「思い遣り」もまた、今日求められているものではないだろうか。

このような私自身の問題認識に基づいて、次回には「冬のソナタ」のアーレント的フェミニズム的解釈を行なって行きたいと思っている。(未完)

註

- 1 韓国中央日報 (2005年6月22日) ムン・ギョンラン女性専門記者 ホン・ジュヨン記者
- 2 Korean TV Dramas and Asian Women's Identities Part 1: TV Drama as an Asian Ideology
 - The Dilemmas of Modern Working Women in Hong Kong: Women's Use of Korean TV Dramas (Lin Angel: City Univ. of Hong Kong)
 - Inter-Generational Differences in Pleasures Derived from Watching Korean Melodramas: A Hong Kong Case (Kwan Becky : Baptist Univ. of Hong Kong)
 - Filial Piety in the Family and Love in the Marriage: Gender Identity of Contemporary Urban Women in China (Zhang Yulian:Shanghai Normal Univ.)
 - Korean TV Dramas and Asian Women's Identities (Lee Sooyeon : Korean Women's Development Institute)

(WW05 Abstract Book p.222)

- 3 Message From Bae Yong Joon (<http://www.yongjoon.jp/>)

親愛なる家族の皆さまへ

こんにちは、ペ・ヨンジュンです。

今日、久しぶりに休むことになり、ここに皆様へ文章を残します。

去る17日、映画『外出(4月の雪)』の記者会見で独島(竹島)問題に関する質問を受けて以来、とても悩んできました。あの場でこれほど重要な問題に対し意見を明らかにすることは多方面で適切ではありませんでしたが、そんな状況的な側面を離れ、その数言の返答だけが多くの記事に載り、インターネットでは論争の話題になりました。当時、あの記者会見では最善を尽くしてお話しさせていただきましたが、その後このような文章を書く理由は、何よりも私たち家族の皆さん、そして今、私がすることを一生懸命よくやっていると信じてくれている両親にもこれ以上心配をかけたくないからです。そしてあのときの返答で、作品を語る場ではない適切な次の機会にもう一度お答えしますと答えた、その一言の約束を守るためです。

ですから今、この場所でいつも私を見守っていて下さる家族のみなさんにまず申し上げようと思います。

答えはひとつですが、それに対する意見もひとつ申し上げようと思います。独島は大韓民国の領土で、だからそもそもと理性的に対処しなければならないと思います。独島が誰の領土なのか一言ずつ言いながら実際に変わることは何なのか、真の解決のためにどんな助けになるのか、冷静に考えてみる必要もあると思います。国民たちがこれ以上感情的な対立によって傷つき、関係悪化に発展しないようにという願いも切実です。何よりも、この重要な国家的な事案については両国の国家政策を決定される方たちが賢明な方法で早い段階で対処して下さるはずと信じています。国民たちがこれ以上痛みを経験しないことを国民の一人として、心配しながら願っています。私に与えられた役割があるならば、国家領土の線を引き言葉の一言より、アジアの家族たちの心と心の線をつないでいくことではないかと思います。そしてその仕事に最善を尽くしたいです。今までどおり、アジアにいる私たち、家族と良いことをしていこうという心はこれからも変わることはないでしょう。ですから私が今まで受けてきた過分なほどの愛をより大きな愛でお返すために努力します。

2005年3月21日 ペ・ヨンジュン 拝

- 4 「韓流」の源流① シリーズ「ニッポン人・脈・記」(朝日新聞2005年5月23日 夕刊記事)より
- 5 『冬のソナタは終わらない』p215-6(廣済堂出版 2005年)
- 6 岡野八代・志水紀代子共訳『ハンナ・アーレントとフェミニズム』(未来社 2001年)

志水：ハンナ・アーレントの政治哲学 (10) - 1
『冬ソナ』、『ヨン様』ブームのアーレント的・フェミニズム的解釈

- 7 雑誌『未来』2004年2・3月号 掲載「今、ハンナ・アーレントを読む」6・7回
- 8 'On Friendship in "Dark Times", by Lisa J. Dish : Feminist Interpretations of Hannah Arendt : edited by Bonnie Honig, Penn State Press, 1995) 岡野八代・志水紀代子共訳『ハンナ・アーレントとフェミニズム』(未来社 2001年)
- 9 *Men in Dark Times : On Humanity in Dark Times ; Thought about Lessing*, New York : 1968 『暗い時代の人間性』(筑摩書房) あとがき
- 10 竹島(韓国では独島)はその領有権を巡って、今年3月、島根県が県議会で「竹島の日」を決議、その日本への帰属を内外にアピールしたことにより日韓の新たな外交問題の火種となった。日本では島根県隠岐郡隠岐の島町に属しているとする。隠岐島からは北西約157Km、韓国の鬱陵島(うつりょうとう)からは約92Kmの位置(北緯37度9分30秒、東経131度55分)に在る。竹島(独島)は日本・韓国双方の大陸棚とは繋がっていない孤島であり、島は2つの小島(西島、東島と呼ばれる)と、これを取り囲む数十の岩礁で構成されている。この2つの主島は、いずれも海面から屹立(きつりつ)した峻険な火山島で、幅約150メートルの水道を隔てて東西に相對している。面積は全ての島嶼(とうしょ)を合わせても約0.2平方kmで、日比谷公園ほどの大きさしかない。
- 11 ペ・ヨンジュンの日本公式HP (<http://www.yongjoon.jp/>) (竹島問題2005年3月18日の書き込みより)
- 12 全20話のうちの15話「過去への旅路」の中で、チュンチョンからソウルへ所用で出てきたゴリラ先生が、同窓生たちをよび寄せる。ユジンとの結婚を解消したばかりのサンヒョクたちを前に、ユジンもその席に呼んだことについて「どんな理由で別れたにせよ、恋人である前に友達 (friend) だろう」という。又、ユジンといっしょに現れた交通事故死したはずのチュンサンに驚くが、二人の登場で失恋したチェリンとサンヒョクがただならぬ様子で席を立った後、残された4人に「何があったか知らんが、ちゃんと和解 (make peace) しろよ。ちゃんと仲直りしろ」と繰り返している。